保育における「別れ」

浜口順子

子どもと大人は離れていることが多い

保育者はその子（the child）とずっと一緒にいられるわけではない。幼稚園や保育所の保育者は、子どもが帰宅すると、次の日登園するまで会えない。親などの保護者にとっても、逆のことが同様に言える。保育する者と子どもの間の時間は連続していない。子どもと大人それぞれが各々別々に生きる時間が、あいだあいだに挿し挟まって、保育は展開する。別れと出会いを繰り返し、再び出会うために別れがあるとも言える。保育に「別れ」の時間があることは普通の事実であって、「必要悪」でもないし、まして、保育所などの社会的保育の必要性をことさらに擁護するための論理として引き出そうという話でもない。

根ヶ山光一氏は、乳児期の子どもをもつ母親の日常的な行動を観察し、日本とイギリスで共通して、相互の「接触」時間よりも「遠隔」時間のほうが長いということを、その著書『〈子別れ〉としての子育て』において報告している（註1）。

考えてみれば当たり前のこととも言えるが、改めて認識させられると不思議な気もしてくる。人生最初のよるべない時期なのに、大人は決してつきっきりで保護しているわけではない。根ヶ山氏は比較行動学の見地から、「離れながら保護することがヒトの子育ての基本」であるという基底線上に、ヒトの成長を親から離れていく「子別れ」の過程としてとらえる。いわゆる「子離れ」とも違い、また親との死に別れというような別れでもなく、分離という視点からヒトの育児・成長を見据えようとしている。

「出会い」と「別れ」

保育現場では、「出会い」という言葉が比較的よく使われるが、それに比べると「別れ」は、その「出会い」を浮き上がらせるための下地（背景）として自然に了解されているものであろう。入園式・始業式における出会い、登園してくる子どもとの毎朝の出会いなどは、保育プログラム上に組まれ準備される出会いであり、それぞれに卒園、降園、クラス替え（担任交代）などの「別れ」が前提とされている。

また「出会い」と「別れ」は、一日の保育時間の中で何度も起こるとも言える。一人の保育者が特定の子どもと連続してかかわれ（ら）ないということ、離れて遊んでいる子どもが時々保育者のことを求めてくることなどがある。「別れ」は、子どもと距離的に離れることでも起こるが、そばにいても気持ちが出会ったり通い合ったりしていないという「別れ」状態もありそうだ。それは、一概にマイナスのこととも言い切れないのではないか。つまり、また出会い直すための「別れ」ととらえることで、子どもも大人も、よき出会いに備えている（開かれている）という見方もできる

からである。

ある幼稚園の保健室には養護の先生がいつもいて、そこでは、病気でもけがでもない子どもがたいてい、いつも数人で過ごしている。その部屋だけ上靴を脱いで入るので、ドアの前の廊下には、いくつか小さい上履きが並んでいる。クラスに何となく溶け込めないで、朝からほとんどそこで過ごす子どももいる。元気に友達と遊んでいた子が、ふと一人になり保健室で過ごすということもある。保健室に来る理由は一様ではないが、いろいろなクラスの子どもがそれぞれの在り方でいて、またクラスに戻っていく。おそらく保健室にはクラスと違う雰囲気があり、養護の先生には担任の先生とは別の安心感を覚えるのだろう。クラスの秩序の中でたとえ充実して過ごせていたとしても、その空気から一時離れて羽を休めたくなるのかもしれない。クラスと別れ、またクラスと出会うための保健室という空間だとも言えそうである。保健室という空間がない園であっても、クラス空間から自由になり、クラス担任とは違う雰囲気で寄り添ってくれる人や場所があると、子どもは繰り返し新鮮な気分でクラスの友達や担任に出会うことができるだろう。

保育者と子どもの間に繰り返される「別れ」は、子どもの育ちが保育者の見守りの中に持続してあるのではなく、むしろ、保育者の目の届かない時間と領野が、子どもと保育者の間に大きく広がっていることを意味する。

園生活における「別れ」と保育者の相互関係

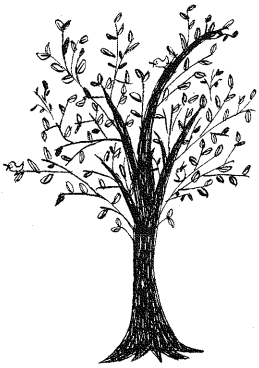
次に園生活における「別れ」をよき「出会い」につなげることを考えてみたい。そのためには、保育者同士の意識が大切な鍵になる。

園の保育において、ある保育者の「別れ」は、

ほかの保育者の「出会い」の機縁になるということが少なくない。先の例にあった養護の先生の役割のように、子どもには、担任の先生のほかに、いろいろな大人と出会う機会がある。他学年の担任や、フリーの先生、用務員さん、地域の人たちなどと、毎日のように顔を合わせる。一人でも、その中に、子どもに忌避や無関心を示す人がいたとしたら、子どもの園生活は、たちまちいびつなものになるだろう。あそこには行かないようにしよう、あの大人にはかかわらないほうが安全だというような感覚を、子どもが園生活の一部に対して抱くとしたら不幸である。子どもが園で出会う人は皆、保育の当事者となり得るのであり、子どもの園生活における安心感を支え、共に過ごす人として子どもに感じられるような存在でありたい。

そう考えると、それぞれのクラス担任は、その子（the child）が育つための環境的ファクターとして自分自身以外の者も多様にかかわっているという事実をいさぎよく認め、それを前提に自分のできることを探求する態度をもつべきなのであろう。しかし、それは必ずしも簡単なことではなさそうだ。

ある幼稚園のカンファレンスで、教員同士の協力関係について、次のような発言があった（註2）。これを読むと、人に子どもの保育を委ねるということは、それほど日常的なことでもないという感覚があるようだ。



A　手助けをして、補助してもらう部分でも、こちらの手が足りなくて補ってもらっているっていうこと以上に、それで自分がやれる以上に、いろんな人から気持ちをかけてもらうことが子どもにとってはすごくいいんだっていう気持ちで、補助してもらったりすることが受け止められたりとか、そういうことがあるの。

子どもにとっても、自分以外の人がかかわることが、不足を補うという意味以上に大切だということに思い至っている。その子が育つために他者と協働する必要があり、その子の成長に自ら貢献し得る領野の限界を認識することに通じる。それは次のような対話にも表れている。

B（隣のクラスで保育がうまくいっているような話を聞くと）自分の足りなさにつながっちゃったりして。

C　その気持ちわかる。なんか、あせっちゃうようなね。

D　そうならないもんね、今ね。

その子の育ちのために必要というだけでなく、保育者同士が保育を他者とシェアしながら育ち合えるという認識に開かれていくという良循環がうかがわれる。一人の保育者のできることの限界を隠さず明らかにすることで、自分以外の保育責任者（親や他機関の保育者なども）と一緒に協力の仕方を話し合ったり（約束）連携を確保したりしていけるならば、「別れ」を積極的に生かすということになるだろう。

ある公立保育所の園内研修資料に、次のような文章があった。

朝からP児はイライラしていることが多くなってきた。たまにだが、かみつきやかじったりもある。朝、母親に怒られて登園すると、イライラしていることが多いことがわかった。イライラして（祖母が送ってくるが）祖母の目の前で悪いこと（友達にいばったり、物を投げたり）をすると、祖母に叱られてますますイライラが増える。…私がどうしたらそのイライラを拭ってやることができるだろうか？　母親の心にまで入り込めはしないので、対話をしていても、すぐにどうこうなるというのは難しいことだ。では、私にできることは何か？　保育園にいるときだけでも、P君の心を安らかにし、過ごしてもらうことだと思う。しかしそれが一朝一夕にはいかないのである。A保育士とよく話し合ってがんばっていきたい。

母親との地道な対話を繰り返しつつ、保育所の中でできることを保育士は追求するのだが、週末や長い休み明けに、子どもの状態が逆戻りしているようなことが繰り返されると、保育士は無力感や焦り、挫折に近い心境を経験する。しかし、子どもがよりよく育つ環境を創造するという視点に立ち、この保育士は「母親との対話」や「保育園にいるときだけでも」P児の経験を豊かにしようと心掛けている。

子どもと保育者の間に、不可避的に「別れ」があるということを保育学的に意味づけると、逆説的ではあるが、保育のすべてを計画し統括することはできないという究極的な「あきらめ」をもつことにつながる。しかし、それは積極的な「あきらめ（諦念）」でもある。自らが背負い、自分が解決する責任があるということをやめるのではなく、ほかの保育者にも開いて委ねるということを

同時にめざすのである。この諦念が自己責任や計画性の放棄と結びついてしまっては有害となるが、保育者が実際にかかわっている時にできることを明確にし、また別れている間に、保育者の側で何ができるのかについて積極的に考え話し合う可能性を呼び起こすと考えることもできる。

予期せぬ偶然的な出来事も、言ってみれば見知らぬ「保育者」のようなものである。計画していなかった出来事を前に、それに身を任せるという「別れ」も保育でよく起こっているのではないか。保育者がその都度責任ある態度を取るために必要な構えとして「別れ」を受け止め、「担いつつ委ねる」という姿勢をもつ必要がある。

最後に、「別れ」の必要十分条件として、保育者がその子どもへの信頼、希望を抱き続けられるということを忘れてはならないだろう。子どもの自ら育つ力を信じ、それを期待して、人に委ねるという「別れ」への決意が必要なのではないか。そうして初めて、この「あきらめ」は前向きなものとなり、教育的意味をもつに違いない。

「出会い」と同様、物理的な次元と存在論的な次元の間で、「別れ」のとらえ方は表面的にも深層的にもなるだろう。物理的に別れる時間があることで初めて、保育者は子どもを保育し続けられるというパラドックスがある。連綿と続く日常性にこそ、保育という営みの本質があるからである。

（お茶の水女子大学）

註

1　根ヶ山光一『〈子別れ〉としての子育て』ＮＨＫブックス　二〇〇六　一〇六～一〇八頁

2　お茶の水女子大学附属幼稚園幼児教育研究会「保育の研究」（平成八年度）一九九六